

「現地を訪問して想うこと」

この度の東北応援ツアーを振り返る時、最も印象強く思い出されるのは、大槌町の駅舎跡に立った時のことである。やや西に傾き始めた陽射しの中で数枚の写真を撮った後、建物の痕跡もないここにいかなる形の駅舎が建っていたのか、この駅を利用していた人達はどんな表情でこの場所を行き来していたのか、私はそんなことを思いながら、ふた夏が過ぎて鉄路を覆い尽くす雑草を静かにただ黙って眺めていた。

現地に行かなければ分からないものは臭いだと聞いていた。確かにその通りだが、大槌町へ行って私に被災地であることを実感させたのは、音である。その場所に紛れも無くあった筈の音、人々が駅を囲んで生活していた音があの日あの時を境にほとんど無くなってしまったのだ、と私は遠くから僅かに聞こえてくる音を耳にしつつ繰り返し呟いていた。

釜石から宮古までの車窓からの被災地復旧・復興の状況は、そのための資金、自治体の職員の数等々いろんな要因があるとは思いますが、その進捗に差が生まれつつあるのを感じた。が、それでもこの地域の復旧・復興が着実に進んでいることを自分の目を通して知ったし、今回のツアーが次に自分に出来ることを考えさせるものとなったことを思えば、今後もより多くの校友たちに現地に行っ

岩手県コース 北川孝規 (1971年 法学部卒)